

## 平安朝和歌に詠まれた蛍

丹羽 博之

蛍は童謡「ほたる」やスコットランド民謡を翻訳した「蛍の光」にも歌われ、古来夏の風物として日本人に慣れ親しまれてきた。古典作品に詠まれた蛍については、上野理氏「伊勢物語の藤と蛍」（『東洋文学と研究』第十九号）、鶴田光恵氏「蛍小考―平安時代を中心に―」（『国文目白』十二号）等の御論文がある。また、中国文学に詠まれた蛍に関しては、山崎みどり氏「蛍のイメージ」（『中国詩文論叢』第三集）があり、同論文では日本文学に詠まれた蛍についても言及がある。山崎氏論文の発表と相前後して、私も平安朝和歌に詠まれた蛍について口頭発表した（平安朝和歌に詠まれた蛍―漢詩文受容の側面―和歌文学会関西例会 一九八四年四月二十一日於大阪大学）。山崎氏の見解と私見とでは大筋においては一致するものの、尚、一部見解を異にする箇所もあり、本稿では平安朝和歌に詠まれた蛍の詠を中心に卑見を述べる。

### 一、上代に詠まれた蛍

蛍が文学作品に登場するのは上代からであるが、その数は僅かである。

A 然彼地多有<sub>ニ</sub>螢火神及蟬声邪神<sub>一</sub>

平安朝和歌に詠まれた蛍

B 少無<sub>ニ</sub>蛍雪志<sub>一</sub> 長無<sub>ニ</sub>錦綺工<sub>一</sub>

(『日本書紀』神代下)

C<sup>344</sup> この月は 君来まさんと 大舟の 思ひ頼みて いつしかと 我が待ちをれば もみち葉の 過ぎて去にきと 玉梓の 使ひの言へば  
蛍なす ほのかにききて

(丹墀広成「述懐」『懷風藻』)

(『万葉集』卷十三挽歌。本文、訓は日本古典文学全集に拠る。) 等が上代文学に表われた数少ない蛍の例である。書紀の例の「螢火の神」(ホタルヒノカカヤクカミ)は神の威光を螢光に例えたものであり、『懷風藻』の例も、中国の名高い車胤、孫康の故事を詠んだものであり、『万葉集』の場合も「ほのかに」の枕詞として詠まれている。このように、上代文学では蛍が登場することは極めて少なく、しかも蛍そのものが、景物、素材として正面から詠まれた例は見当たらない。また、平安前期においても

客断<sub>ニ</sub>柳門<sub>一</sub> 群雀噪 書晶<sub>ニ</sub>蓬室<sub>一</sub> 晚螢来

(桑原宮作「伏枕吟」『凌雲集』)

悲栽冢上新生樹 哭放窓頭旧聚螢

(「傷<sub>ニ</sub>巨三郎<sub>一</sub>」、寄<sub>ニ</sub>北堂諸好事<sub>一</sub>」『菅家文章』卷二)

等の例は共に蛍雪之功による観念的な詠まれかたである。しかし、その一方では

潭鳥鳴兮音冷 岸螢落兮火微

(仲雄王「重陽節神泉苑賦」秋可<sub>ニ</sub>哀<sub>一</sub> 応制一首」『経国集』卷二)

と『経国集』において初めて蛍は秋の景物として登場する。

一方、平安朝和歌に目を転じてみると『万葉集』では僅かに一例しか蛍は詠まれておらず、しかも枕詞的な詠まれ方であったが、平安朝和歌になると一挙に詠まれる数が増大する。その先鞭をつけたと思われる現存最古の例として

(前略) やどりの方を見やれば、海人の漁火多く見ゆるに、かのあるじのおとこよむ

晴る、夜の星か河辺の蜩かもわが住むかたの海人のたく火か

(『伊勢物語』 八七段)

が挙げられる。この業平の詠と思われる歌は漁火を晴れた夜の星か、河辺の蜩かと見紛うという見立てであり、上代には見られなかった新しい詠まれ方である。

以下、このような見立ての例を挙げると

(鴈靡花) 右

友則

わたつみの沖なかにひのはなれいて、燃ゆとみゆるはあまつほしかも

(「宇多院物名歌合」萩谷朴氏『平安朝歌合大成』による。以下、歌合は同書による。『拾遺抄』では伊勢の作)  
(延喜二年 五月中宮御屏風の歌二十六首) うかは

151 大空にあらぬ物から川かみにほしとそ見ゆるかかり火の影

(「紀貫之」正保版本「歌仙家集」『私家集大成中古I』以下、私家集は同書による。)

499 ゆふやみにあまのいさり火見えつるはまかきのしまのほたるなりけり。

(「順百首好忠I」所収)

宇治前太政大臣卅講のちうたあわせしはべりけるにほたるをよめる

藤原良経朝臣

217 さはみつにそなるほしのうつるかともゆるはよはのほたるなりけり

(『後拾遺集』 卷三夏)

等が星と蜩と漁火の見立てを詠んだ初期の代表的な例であり、時代が下ってもこれらの見立ては詠まれている。これらの見立ての例は現存する資料では在原業平の例を嚆矢として、平安朝和歌には数多く詠まれている。上代の文学作品では蜩は殆ど詠まれることがなく、詠まれ

平安朝和歌に詠まれた蛍

たとしても枕詞に用いられていたり、蛍雪の功の故事として観念的に詠まれているのとは趣を異にする。

上代の作品に余り例がなく、平安朝になり、所謂国風暗黒の時代以降に急速に文学作品として詠まれる例の多くは、漢詩文の影響の下に新しく文学素材として獲得されたものであった。

この蛍も同様で、以下に挙げるような漢詩の詠まれ方の影響が考えられる。

騰空類星隕 空に騰れば 星隕つに類す

松樹若花生 樹を払へば 花生ずるが若し

井疑神火照 井には神火の照るかと思ひ

簾似夜珠明 簾には夜珠の明きに似たり

(梁簡文帝「詠螢」『芸文類聚』卷九十七虫豸部・螢火『初学記』卷三十・螢)

類若飛焱之宵逝 類として飛焱の宵に逝くが如し

曄如星移之雲流 曄として星移りて雲に流るるが如し

(晋潘安仁「螢火賦」同)

入林如燐影 林に入れば 燐の影の如し

度渚若螢飛 渚を度れば 螢の飛ぶが若し

(梁元帝「詠池中心燐影」)

等、六朝詩を中心に、螢と星と火の見立てはさかんに詠まれている。しかも、奈良、平安朝人が愛用したといわれる『初学記』『芸文類聚』の「螢」にも収められており、日本の漢詩にもこれらの見立ては詠まれていく。

非燈非燭又非螢 驚見荒村一小星

問得家翁沈病困 夜深松節照柴局

(「野村火」『菅家文章』卷四)

この菅原道真の詩にも、ともし火、螢、星の見立ては詠まれており、特に、起、承句は前掲の『伊勢物語』の「晴るる夜の星か河辺の螢かもわがすむかたのあまのたく火か」の詠まれ方と類似している。このほか時代は下るが、よく似た詠まれ方として

乱過弧藁来水閣 乱れて弧藁を過ぎ 水閣に来たる

飛交一葉類漁舟 飛びて一葉に交り 漁舟に類す

望光屢誤載星節 光を望めば屢ば誤る 星を載く節かと

翫景方疑捷燭遊 景を翫べば方に疑ふ 燭を捷る遊びかと

（惟宗孝言「翫螢」の一部『本朝無題詩』卷三）

があり、あたかも螢の詠の集大成のような詠まれ方であり、これらの連想が当時日本の詩人達にごく一般的に受け入れられていたことを示すものであろう。このほか、舟の火と星の見立てとして

岸上松声眠裏雨 舟中火星望前星

（淳和帝「奉和江亭晚興」、呈左神策藤將軍」『凌雲集』）

の例もある。

さて、平安朝和歌の螢の見立てに戻って考えてみると、これらの例はやはり日中の漢詩に倣ってそのままストレートに和歌に翻案されたと考えらるべきであろう。次に現存する最古の例である『伊勢物語』八十七段の在原業平の詠について考えてみる。八十七段の布引の滝行樂には兄の行平も同行している。行平は古今集真名序で「以他才聞」と称されたように漢詩文の造詣の深い人物であり、そうした兄や同行した中にもいたであろうと思われる漢詩文の素養の深い人人を意識して在原業平はこの歌を詠んだものと思われる。この歌に対して、兄行平をはじめ同行の人人はすぐに前掲の漢詩の表現が脳裏に浮かんだものと思われる。芦屋の浜から遠く紀州まで弧を描く大阪湾に浮かぶ海人の漁火を漢詩の表現を下敷きにしながら巧みに詠んだ当意即妙の歌才に並み居る人は舌を巻き、感嘆したのであろう。この歌を一読して漢詩の表現の背景を理解しなければ詠者の意図を正しく理解したことにはならないであろう。また、当時の人の真の鑑賞態度にも迫れない。

三、蛩と『礼記』月令編

蛩の詠は平安朝になって漸く多様化の傾向を示すが、その中には次のような奇妙な歌も詠まれた。  
置く露に朽ちゆく野辺の草の葉や秋の蛩となりわたるらむ

(「是貞親王歌合」(寛平安五年九月以前秋)『夫木抄』では忠峯)

朽ちゆく野辺の草の葉が秋の蛩となるというのは現代人の感覚からは何のことか理解に苦しむ。しかし、これも『礼記』「月令篇」の  
季夏之月 腐草為蛩

を念頭に置いて詠まれたものであり、<sup>注1</sup>「腐草為蛩」を背景において理解しなければ、この歌の正しい解釈は導き出せない。また、『白氏六帖』(卷二九・蛩)にも

腐草化為蛩<sub>季夏大暑之日</sub>

とみえる(本間洋一氏「王朝和歌の表現と漢詩文について―中古・中世私家集の世界と『朗詠集』のことなど―」『和漢比較文学』六号 平成二年十月)。

『礼記』「月令篇」が当時の人人に馴染まれていたことは、同じく「孟春之月 東風解氷」を踏まえた  
袖ひちてむすびし水の氷れるを春立つけふのかぜやとくらむ

(『古今集』卷一春上)

の例を見るまでもなく明らかである。

この「腐草為蛩」は

応<sub>レ</sub>知腐草蛩先化 且泣炎州鼠独生

(「路次観<sub>ニ</sub>源相公旧宅<sub>ニ</sub>有<sub>レ</sub>感」『菅家文章』卷二)

変化有<sub>レ</sub>時生腐草 変化時有りて 腐草より生ず

浮沈不定度清流 浮沈定まらず 清流を度る

(惟宗孝言「翫<sup>レ</sup>螢」『本朝無題詩』卷二)

等の例をはじめ、中国の漢詩にもしばしばその例を見る。しかし、和歌の例には管見の及ぶかぎりにおいては他の例は殆んど見えない。

思うに、この「腐草為<sup>レ</sup>螢」は日本人の感覚には合わず、それゆえ、漢詩文と深い結び付きを有する「是貞親王歌合」という特殊な歌合以外では詠まれることが殆ど無かったのであらう。中世になって、漸く

97 故里は葦の八重ぶき朽ち果てて螢のみこそひまなりけれ

(「有房II」)

95 沢辺なる草のした葉や朽ちぬらん螢飛ぶなり夏の暮方

(「公賢」)

などの例を僅かに見る(前掲本間氏論文)。

一口に和歌における漢詩文受容といっても千差万別であり、歌人たちはやみくもに和歌に漢詩的表現を摂り入れたのではなく、そこにはやはり、自づと日本人の美意識、情趣に沿うよう取捨選択が行われた。その結果、日本人の感覚に合わない「腐草為<sup>レ</sup>螢」は自然と排除され、他の歌人たちには詠まれなかったのではないだろうか。先に取り上げた、螢と星と漁火の連想が日本人の美的感覚にも合い、以後も盛んに詠まれていったのとは好対照をなす。

#### 四、螢と恋歌

次に、恋歌に詠まれた螢の例を示す。

寛平御時后宮歌合の歌

紀友則

平安朝和歌に詠まれた螢

562 夕されば蛍よりけに燃ゆれども光見ねばや人の恋しき

(古今集卷十二恋二)

471 さよふけて我が待つ人や今くると驚くまでも照らす蛍か

(『古今集和歌六帖』卷六はたる)

蛍の飛びありきけるを、「かれをとらへて」とこのわらはにのたまはせければ、汗疹の袖にほたるををとらへてつつみて御覧ぜさすときこえさせける。

つつめどもかくれぬものは夏虫のみよりあまれるおもひなりけり

(『大和物語』四十段)

このように、上代では殆ど詠まれることのなかった蛍は古今集時代になると恋歌の中にも詠まれ始める。古今集時代になって急速に恋歌に詠まれる理由を考えた場合、やはり先ず考えられるのは以下に挙げるような漢詩の影響である。就中、六朝時代に流行した閨怨詩が考えられる。

窓中度<sub>二</sub>落葉<sub>一</sub> 簾外隔<sub>二</sub>飛蛍<sub>一</sub>

(梁何遜「閨怨」『玉台新詠集』卷五)

草蛍飛<sub>二</sub>夜戸<sub>一</sub> 糸虫繞<sub>二</sub>秋壁<sub>一</sub>

(皇太子簡文「楚妃嘆」同卷七)

初霜隕<sub>二</sub>細葉<sub>一</sub> 秋風驅<sub>二</sub>乱蛍<sub>一</sub>

(同「秋閨夜思」卷七)

流蛍漸収<sub>レ</sub>火 絡緯欲<sub>レ</sub>催<sub>レ</sub>機

爾時思<sub>二</sub>錦字<sub>一</sub> 持<sub>二</sub>製行人衣<sub>一</sub>

(梁王均「秋夜二首(其一)」)



盤桓徒倚夜已久 螢火双飛入簾櫳

西北風來吹細腰 東南月上浮纖手

(初唐劉希夷「擣衣篇」)

夕殿螢飛思悄然 弧燈挑尽未成眠

(中唐白居易「長恨歌」)

このように螢は女性の孤独な閨の秋の景物として、絡緯(はたおり虫)とともに秋の閨怨詩と強く結びついている。この点に関して前掲山崎みどり氏論文では「六朝期から詠まれるようになった閨怨詩の例は非常に少ない。螢は中国人の閨怨的な情調を呼び起こす素材ではなかったらしい。」と述べられることと私見とでは相反する。唐詩になると、そもそも閨怨詩自体が詠まれることが少なく、いきおい螢は閨怨的な情調を呼び起こしにくいことはあったであろう。しかし、山崎氏論文でも引用された盛唐王維の閨怨詩「班婕妤」の

玉窗螢影度 金殿人声絶

秋夜守羅帷 弧燈耿不滅

を始め、前掲の劉希夷、白居易等の閨怨詩等秋閨と螢の結びつき、連想は用例は少ないながらも脈々と続いているように思われる。

六朝時代を中心に盛んに詠作された閨怨詩が古今集時代の恋歌にも影響を及ぼしたことについては、山口博氏(「小町閨怨」『中古文学』二十二号一九七八年九月)、泉紀子氏(「新撰万葉集における漢詩と和歌」『女子大文学』第三十二号一九八一年三月)の考察があり、私も「曾丹集と閨怨詩」(『国文学研究ノート』第十三号一九八一年四月)において、『玉台新詠』などの閨怨詩の平安朝和歌への投影を述べた。このように、古今集時代の和歌と閨怨詩(日本漢詩も含む)の間には密接な関係が認められる。先に挙げた螢が詠まれた恋歌もその延長線上において考えるべきであろう。

但し、恋歌の場合は螢の火に「恋の思ひ」「胸の熱き思ひ」が掛詞として用いられ、更には「燃ゆ」と縁語になり、和歌的修辭技巧としての興趣を併せ持つようになった。閨怨詩では螢は単に孤閨の描写、素材として詠まれているのに対して、和歌では螢の灯す火から燃ゆる胸の思いをかきたてるものとして詠まれており、忍ぶ恋の情調に合致した詠まれ方になっている。恋歌の螢は、平安歌人の好みに沿うべく、

平安朝和歌に詠まれた螢

掛詞、縁語を用いて日本化され、より深化された詠みぶりになっていると言えよう。

次に一首の和歌の中に蛍と蟬が詠まれている例について考察を加える。

543 明けたてば蟬のをりはへ泣きくらし夜は蛍の燃えこそわたれ

(『古今集』卷十一恋一)

472 昼はなきよるはもえてそなからふるほたるもせみも我身なりけり

(つらゆき『古今和歌六帖』卷六 ほたる)

鳴く蟬ももゆる蛍も身にしあれば夜昼ものぞかなしかりける

(『宇津保物語』「祭の使」)

17 ひるは蟬よるは蛍と身をなして鳴きくらしはもえあかすかな

(「定頼II」)

等その例は少なくはない。『古今集』の例について小沢正夫氏は「上の句と下の句との用語も文脈も対偶をなしているのは漢詩の一節のようである。」と評されている(日本古典文学全集『古今集』)。万葉集に蟬を詠んだ例は、次に挙げるように僅かである。蟬を詠んだ歌の系譜を見ると、

蟬を詠む

1968 黙もあらむ時も鳴かなむひぐらしの物思ふ時に鳴きつつもとな

(「夏雑歌」卷十)

蟬に寄する

1986 ひぐらしは時と鳴けども恋ひしにたわやめ我は定まらず泣く

(「夏相聞」卷十)

この他、夏の景物としての蟬の詠は数首あるが恋歌と結びつく例は殆ど無い。

ところが、閨怨詩中においては、蟬は秋の景物として、蛩とともに、しばしば詠まれる。

冽冽寒蟬吟 蟬吟抱枯枝

涼風繞曲房 寒蟬鳴高柳

(梁簡文帝「於清河見輓船士新婚別妻一首」『玉台新詠』卷二)

更には、蛩と蟬が一首の閨怨詩中に於て詠まれる例もある。

昼蟬已傷念 夜露復霑衣

昔別曾何道 今夕蛩火飛

(晉陸機「擬明月何皎皎」『玉台新詠』卷二)

等の例がある。また、閨怨詩ではないが、蛩と蟬が詠まれた例として、

蟬啼覺樹冷 蟬啼きて樹の冷きを覚ゆ

蛩火不温風 蛩火風を温めず

(梁吳均「雜絕句四首(其一)」『玉台新詠』卷十)

孟秋良辰、七夕清節。涼氣初升、鳴蟬驚於園柳。素露方凝、金蛩燒於砌草。

孟秋良辰、七夕の清節。涼氣初めて升ぼり、鳴蟬園柳に驚く。素露方に凝り、金蛩草を焼く。

(唐太宗「秋日斫庾信体」)

(『寧良遺文』「人人啓狀」小島憲之先生御教示)

等が挙げられる。このように蟬も蛩も秋の景物として一緒に詠まれ、閨怨詩とも強く結び付いている。さきに挙げた『古今集』五四三番の歌に対して「用語も文脈も対偶をなしているのは漢詩の一節のようである」と述べられた小沢正夫氏の評は正鵠を射たものといえよう。これらの漢詩、特に、閨怨詩における蟬蛩の取り合せが、前掲の『古今集』『宇津保物語』『定頼集』の恋歌に少なからぬ影響を与えたものと思われる。

## 五、夏の蛍、秋の蛍

さて、前掲の蛍の例の「秋の蛍」は「夏は夜。蛍の多く飛びちがひたる」の如き、蛍を夏のものとする日本の季節感とは相違する。漢詩の世界では『礼記』『月令篇』以来、蛍は秋の景物とする伝統があり、上野氏、山崎氏論文も指摘されるように「秋の蛍」は中国の蛍の影響によって詠まれたものであろう。しかし、平安朝和歌においては

### 秋

春の野にもゆとか聞きし蕨にも燃えこそまされ秋の蛍は

わらびのかへし、春御方

はかもなき秋の蛍を春の野にもゆる蕨にさらにたとへじ

(六二 応和三年七月中旬宰相中将尹伊春秋歌合)

の例を最後として、以後の和歌では「秋の蛍」の例は未見であり、有ったとしても其の例はわずかであろう。その一方で、後拾遺集以降になると、蛍は夏の素材として詠まれ始める。

ほたるをよみはべりける

源重之

216 おともせでおもひにもゆるほたるこそなくむしよりもあはれなりけれ

宇治前太政大臣卅講ののうちたあわせしはべりけるにほたるをよめる

藤原良経朝臣

217 さはみづにそらなるほしのうつるかともゆるはよはのほたるなりけり

(『後拾遺集』卷三夏)

これらの例を始め、勅撰集(新編国歌大観)では、『詞花集』二首(73・74)『千載集』二首(201・202)『新古今集』二首(272・273)と夫々

夏の部に収められており、秋の部には収められていない。このように『後拾遺集』の頃を境として、螢は、中国的な秋の螢から日本の季節感に沿う夏の螢へと変貌を遂げていった。

更には、それと同じ現象が平安朝漢詩においても認められるようになる。

一双眠<sub>レ</sub>砌霜寒鶴 一双砌に眠る 霜寒の鶴

万点宿<sub>レ</sub>流水暗螢 万点流れに宿る 水暗の螢

(藤原周光「夏日即事」『本朝無題詩』卷四)

玉琴暗調蟬声急 玉琴暗に調ひ蟬の声急に

紅燭自連螢影疎 紅燭自ら連り螢の影疎なり

(藤原明衡「夏日作。勅」同)

等の例である。それ以前の日本漢詩は、螢は嚴として中国の漢詩以来の秋の景物としての詠まれ方であったが、ここに漸く、日本の漢詩においても、日本の季節感に合うような詠まれ方が登場する。挙例以外にも『本朝無題詩』にはもう数例夏の螢が詠まれている。勿論、秋の螢もその後長く詠まれてはいくが、このような変化の中に、平安朝漢詩の変貌、和風化の一端を垣間見る思いがする。

## 六、螢の詠の流行

以上考察を加えてきたように、螢は平安朝になって急速に和歌に詠まれるようになった。それらの詠の多くは漢詩によったものであろうが、ここで注目されるのは、それらの詠者達である。古今集撰者たちによって、螢の詠は流行の兆が窺える。今再び挙げると

友則

夕されば螢よりけにもゆれども光みねばや人のつれなき  
さよふけて我まつ人やいまくるとおどろくまでもてらす螢か

平安朝和歌に詠まれた螢

貫之

昼はなき夜は燃えてぞながらふるほたるもやみも我身なりけり

忠峯

置く露に朽ちゆく野べの草の葉や秋の蛍となりわたるらむ

暗き夜にともすほたるのむねのひを、しもとけたる玉かとそみる

忠見

いづちとか夜は蛍ののぼらんゆく方知らぬ草の枕に

(『新古今集』卷二夏)

古今集撰者達以前には、僅かに業平の一首だけであったのに対して、春遅き北国の山野に初夏、百花が繚乱する如く、古今集撰者達によって一挙に、且つ多彩に蛍の詠は製作されたようである。撰者たちの一人が業平の歌や漢詩に詠まれた蛍によって、蛍の美を発見し、詠歌素材として己の作中に詠み込み、その斬新さが他の交遊のある歌人に波紋を投げかけた。蛍の詠の新鮮な感動、新たな風情としての興味、「思ひ」「もゆ」の掛詞、縁語といった和歌の修辭技巧として取り込みやすく、忍ぶ恋の情緒にもかない、このように一挙に多作されたのではないか。しかも、これらの詠は他の歌人の蛍の詠の単なる模倣ではなく、夫々が独自に見立てや閨怨詩や『礼記』(必ずしも『礼記』とは言えず、むしろ類書の中の『礼記』の引用や漢詩からであろう。)を和歌に翻案しており、歌人としての力量を示している。また、当時の風潮として、こうした漢詩文による新しい詠歌素材の獲得や掛詞、縁語等の和歌技巧を盛り込んだ翻案が流行していたことを示す一つの証左たりえよう。私は、先に漢詩によって雨中の花に美を発見し、それが後撰集期の親交のある歌人達の間で流行したことを述べた(「雨中の花」『平安文学研究』第七九・八十輯一九八八年十月)。それと同じような、文学活動、流行が古今集撰者達の間でも見られる。但し、蛍は日本人の美意識としても、和歌修辭技巧を取り入れやすいということからも、比較的早くから和歌に詠まれたのに対して、雨中の花のほうは、一世代時代が下ってからであった。やはり、雨中の花に美を認識し、歌に詠むというのは、漢詩に先例があるとはいえ、理性、頭の中では理解できても、なかなか感性的に受け入れにくかったのではなかったか。そうした、平安人の美意識に合致するか否かによって、和歌

への受容にも時代的に遅速があるように思える。

このような、漢詩文の投影による和歌の詠歌素材の獲得は、歌枕と結びついて更に和歌的情绪に適合する傾向がある。例えば、漢語、「月弓」等から想を得た「弓張月」は歌枕高田山と的の縁語として結びつき

雲間微月といふことを

堀川院御歌

383 ししまや高田山の雲間より光さしそふ弓張の月

(『新古今集』卷四秋上)

等が詠作された(拙稿「弓張月攷」『和漢比較文学叢書三』)。また、月のさやけき光を氷に譬える「連観霜縞 周除氷浄(月の光によって連立する高殿は霜のように縞く 周りの庭は氷のように清らか)」(謝荘「月賦」『文選』卷十三)等の表現から、和歌においても同様の試みがなされた。

摂政太政大臣家歌合に湖上冬月

藤原家隆朝臣

639 しがのうらやとほざかりゆく波まよりこほりていづる有明の月

(『新古今集』卷六冬)

等のように、「月と氷」の連想の歌は歌枕志賀の唐崎と結びつき、新古今集的美とも適合して、盛んに詠まれた(拙稿「月氷攷」『古今和歌集連環』)。蛍の詠について言えば、『伊勢物語』の業平歌の影響により、「芦屋」と結びつき、

百首歌奉りし時

摂政太政大臣

255 いさり火の昔の光ほの見えて芦屋の里に飛ぶ蛍かな

(『新古今集』卷三夏)

等の詠が試みられたが、その例は多くはない。縁語としての面白さ、湖上の冬月といった新古今集的美の世界に結びつかず、他の歌人の賞賛を得ず、余り詠作されなかったのであろう。

平安朝和歌に詠まれた蛍

## 結 語

古今集時代の和歌が漢詩の中でも特に六朝詩の見立てや、『芸文類聚』等の類書と深く関わることにについては、夙に、小西甚一氏、小島憲之氏をはじめとする先学の御指摘があり、平安朝になって急速に且つ多彩に詠まれ始めた蛩についても同様のことが指摘できよう。一見純日本的と思われる素材、表現も実はよく調べてみるとその源を中国文学に求め得る例もある。また、中国文学の背景を知らなければ正しい解釈は導かれない場合もあり、その歌を詠むに至った歌人の、あや、苦心、創作意図も理解できないであろう。その一方で恋歌における蛩のように、中国文学の影響を受けながらも平安歌人の好みに沿うように変形され、日本化された例もあり、日本文学と中国文学の等質性と異質性にもかかわる問題である。

今後とも、他の素材、表現においてもこうした例を丹念に調査することが当時の和歌の詠まれ方、享受のされ方を含めた和歌活動をより正しく理解するうえできわめて重要なことである。

## 注

1 渡辺秀夫氏にも同様の御指摘がある（『立秋詩歌の周辺』『平安朝文学と漢文世界』）。

引用した本文は、『日本書紀』『懷風藻』『菅家文章』は古典大系本、『凌雲集』『経国集』『本朝無題詩』は『新校群書類従』に拠る。

本稿は和歌文学会関西例会（昭和六十二年四月二十一日 於大阪大学）において、口答発表したものに加筆、訂正を加えたものである当日御質問、御助言を頂いた方々に厚く御礼申し上げます。

本稿は平成元年度文部省科学研究費補助金（総合研究A）「平安朝前期漢文学の総合的研究」及び昭和六十三年度文部省科学研究費補助金（奨励研究A）「平安朝和歌における漢詩文受容とその変遷」の研究成果の一部である。